

子どもの医療制度の在り方等に関する検討会用 抜粋版

【自治体向け】 医療のかかり方講座 実践マニュアル

小児医療を入口として
高齢化社会を支える医療の礎を築くために



一般社団法人 知ろう小児医療 守ろう子ども達の会

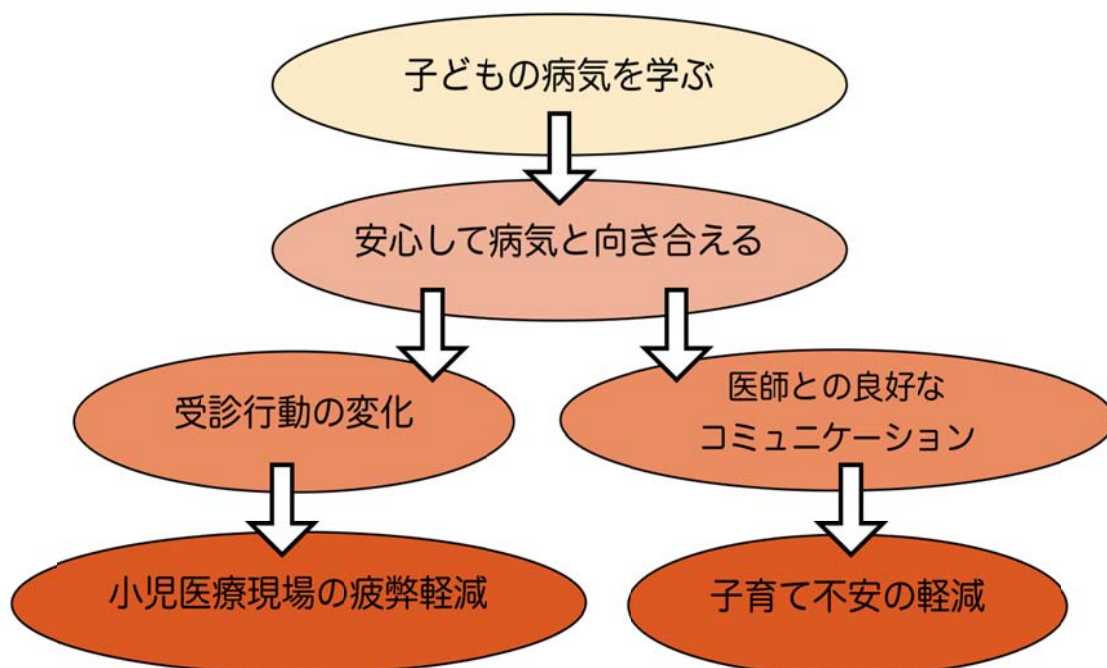
4. 活動の背景

1990年代以降、休日・夜間の救急外来に押し寄せる小児患者の増加が目立つようになりました。また、過労で医師が辞める、亡くなる、そして小児科が閉鎖するという事態も全国で起こりました。そのため、子どもたちが適切な医療を受けることができず、命を落とす場合もあったのです。近年、その状況は落ち着いてきているとはいえ、このような出来事は、日本に住んでいるすべての子どもに起こる可能性があるのです。

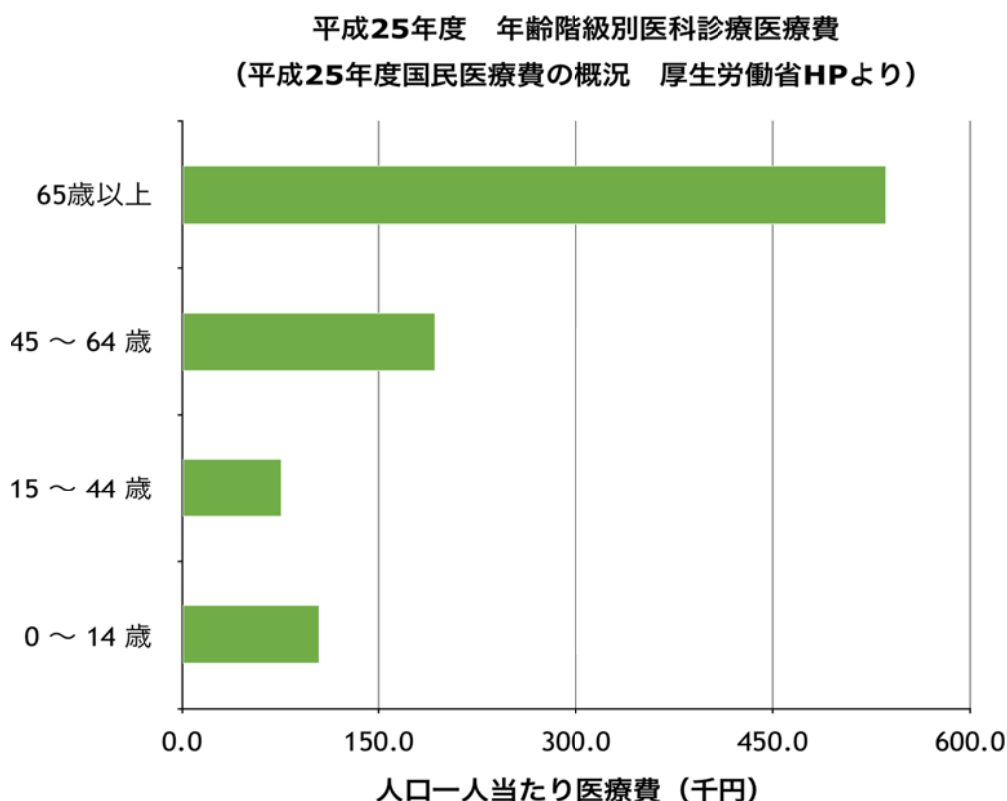
現代日本の親は、子どもの病気のことを何も知らずに親になる人が多く、また、いざというときに助けってくれる人が近くにいない場合も多い世代です。急に子どもが病気になったとき、どうすべきかわからず、不安に駆られ慌てて病院に連れて行くことも少なくありません。親たちは皆、必死に子育てをしています。しかし、その受診行動が小児医療の現場を圧迫してしまう場合もあるのです。

親が子どもの病気を学び、「安心して病気と向き合うこと」で受診行動は変化します。そして医師が親の不安な気持ちを知り、寄り添うことで双方の距離は縮みます。結果、小児科医の負担が減り、小児医療の環境改善へつながります。

しかし、自治体の母親学級・乳児健診で子どもの病気を学ぶ機会はほとんどなく、小児科医が親の思いを知る機会もありません。そこで、**親が子どもの病気について学び、小児科医と親がお互いの思いを知る場が必要だ**と考えています。



また、これから本格的に超少子高齢化を迎える日本の医療現場をいかに支えていくか、ということも重要な課題です。



成長につれて、医療機関にかかる機会は減ってきます。20代、30代では、ほとんど医療に縁のない人のほうが多いかもしれません。このように医療の現状を知る機会がほとんどないままに培われた個々の価値観や考え方(主に受診行動に現れます)は、なかなか変えることができません。

しかし、「自分の子どもの病気に直面したとき」は特別です。病気や医療について真剣に知ろうとし、それを知ったことで行動を変えられるチャンスなのです。

「子どもの病気を学ぶこと」をきっかけにして、家族の介護をするときや自分が高齢者になったときなど、数年後・数十年後の受診行動も変わります。

この観点からも、乳幼児を育てている世代に医療について伝えることが重要だと考えています。

5. 事業によって期待される成果・効果

①適切な対処で子どもの健康と命を守る

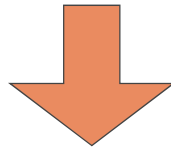
親や周りの大人が子どもの病気や小児医療について学び、救急の判断やホームケア等を身につけることで、適切なタイミングで病院を受診し、子どもの健康や命を守ることができるようになります。

②親と小児科医のコミュニケーショントラブルを防ぐ

親と小児科医が、互いの現状や思いを知ることで、円滑なコミュニケーションが生まれ、医療現場での気持ちのすれ違いから起こるトラブルが減ります。

③小児医療の環境改善

上記の結果として、小児科医の負担が減り、小児医療の環境が改善されます。そして、子どもたちが本当に医療処置を必要とするときに適切な診療が受けられる環境が実現します。



安定した小児医療環境の中、信頼できる小児科医とともに
地域で安心してゆとりある子育てができる未来へ

当会の活動も9年目を迎え、当初は全くなかった自治体による小児医療講座の増加とともに、子どもの病気を学ぶことに関心のある方も確実に増えています。

実際に学んだ方からは、「子どもの病気との向き合い方や受診行動が変化した」との声が数多く寄せられており、活動の成果を感じています。

そして、活動を通じて多くの人たち・団体とのつながりが生まれ、さらなる広がりを見せています。このような親、行政、医療機関等における包括的な小児医療環境改善への取り組みは、これまであまりなかったものです。

しかし、この社会変化はまだ小さな芽で、多くの方の実感とはなっていません。

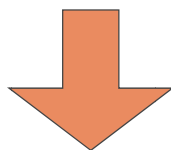
今後の当会は、新たに多くの他団体や自治体と連携し、協働することで、全国的な規模で小児医療の環境改善を目指したいと考えています。

～私たちの活動が小児医療に関わるすべての人の架け橋となることで、小児医療環境が改善し、次世代を担う子どもたちの成長を安心して見守れる社会となるように～

そして、このような社会が実現した先に、少子高齢化社会にも対応できる強固な医療の基盤が生まれるはずです。

④日本の医療全体への関心・理解が深まる

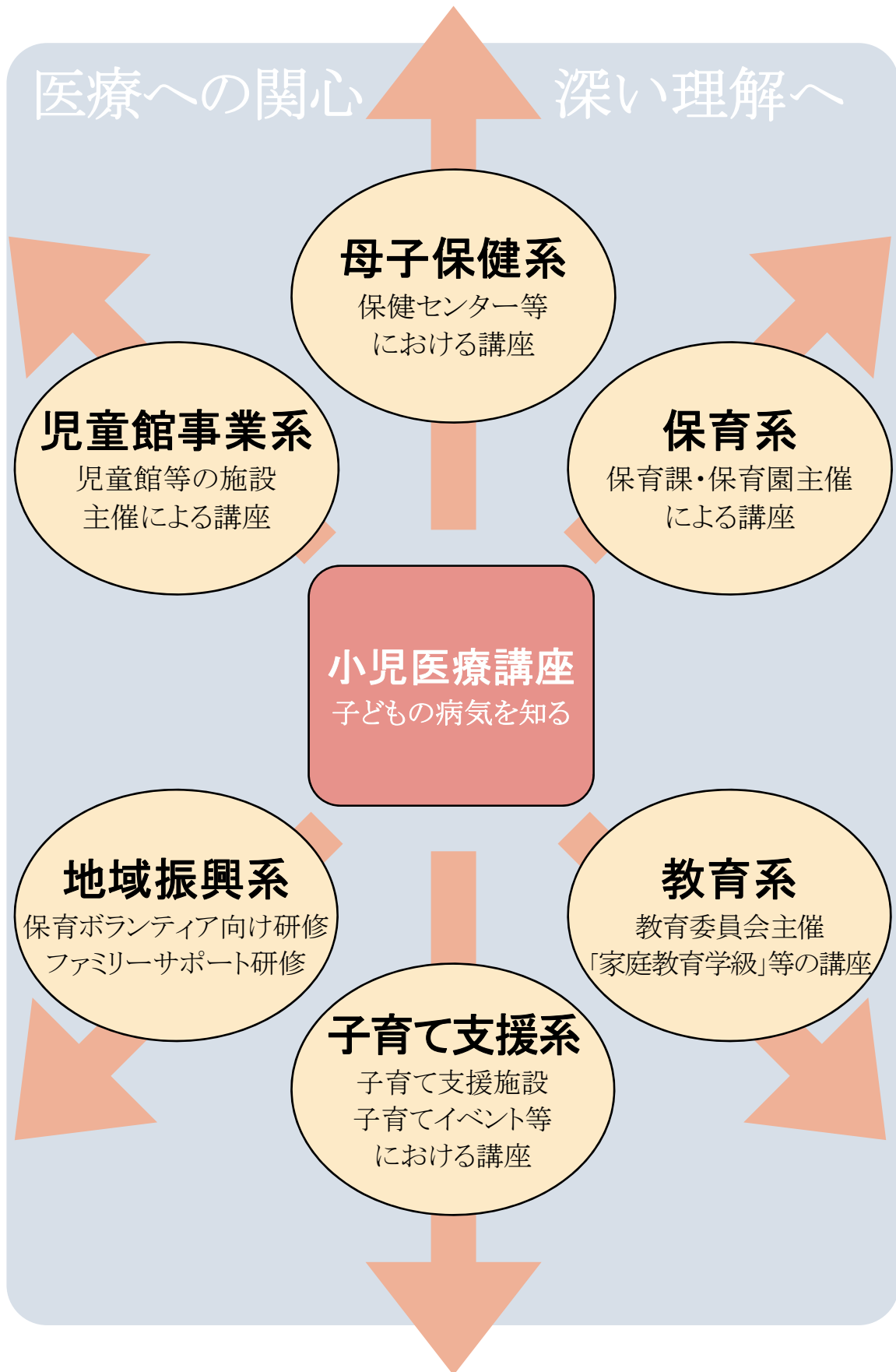
子どもの病気を入口にして、医療のおかれている現状や医療制度を知り、医療機関へのかかり方を学び、市民として安心・安全な医療を築いていこうとする意識が高まることが期待できます。



少子高齢化社会でも揺るがない医療基盤の実現へ



6. 行政による講座開催の事例



開催講座一覧

主催自治体および団体	講座テーマ	開催年度
母子保健系		
東京都杉並区杉並消防署	乳幼児向け救命救急講習	2014
東京都小平市多摩小平保健所	知っておきたい！ 子どもの病気とママがおうちでできるケア	2012,2011
神奈川県横浜市西区 保健衛生課	子どもの健康管理と、お医者さんとの上手な 付き合い方	2011
神奈川県横浜市 こども青少年局・健康福祉局	子育て支援とこども救急医療 (こんには赤ちゃん事業訪問員向け)	2011
東京都新宿区健康推進課	講演「乳幼児に多い病気やケガとその対応」 パネルディスカッション「小児科医療の現状と 私たちにできること～かかりつけ医をもつこと の大切さ 救急医療の利用のしかた～」	2010
東京都福祉保健局医療政策部 小児救急医療係	知っててよかった！子どもの病気 ～おうちで看るとき 救急にかかるとき	2008
教育系		
神奈川県川崎市教育委員会 家庭教育学級	知ろう！子どもの病気とけが	2011
群馬県大泉市教育委員会 就学前家庭教育学級	小児医療の現場から ～子どもの病気 正しく知って適正受診～	2011
神奈川県藤沢市教育委員会 家庭教育学級	ホームケアのコツ・予防注射・小児科医の かかり方など	2011
保育系		
京都府京丹波町立みずほ保育所 父母会	小児医療講座	2014
群馬県高崎市上大類保育園 保護者会	よく見て伝える いつもと違う！？わが子の 様子～お医者さんとの付き合い方～	2013
東京都杉並区こどもヶ丘保育園	救急に行くべき時の見極め方やホームケア、 予防接種など 子どもの病気の見極め方と怪我や投薬など の対応について	2010
埼玉県戸田市戸田駅前保育所 おひさま保育園	知っておくと安心！ 子どもの病気の見極め方と対応の仕方	2010
茨城県つくば市立松代幼稚園	いま小児医療が大変？ ～小児科医はママのパートナー～	2010

主催自治体および団体	講座テーマ	開催年度
子育て支援系		
東京都新宿区子ども家庭部 子育て支援課 共催 子育てサークルゆったりーの	知っておきたい！ こどもの病気とママがおうちでできるケア	2015,2011 2010
	覚えておきたい、 救急に行くべき時とおうちでできるケア	2014
	子どもの病気あわてないで！	2009
神奈川県横浜市瀬谷区 地域子育て支援拠点「にこてらす」	知っている役立つ！ 病気への向かい方、 医師とのつきあい方	2014
神奈川県横浜市西区 地域子育て支援拠点スマイル・ポート	小児科へ行く前に ～大人が知ること・できること～	2014
NPO 法人子育て応援クラブむくむく 共催 埼玉県さいたま市 （【お医者さんの上手なかかり方事業】 平成 26 年度さいたまマッチングファンド 一般助成事業）	上手なお医者さんのかかり方～先輩ママから 聴く、子どもの体調管理の仕方～	2014
NPO 法人子育てサポーター・チャオ 共催 埼玉県越谷市 （【お医者さんの上手なかかり方事業】 平成 26 年度さいたまマッチングファンド 一般助成事業）	上手なお医者さんのかかり方～先輩ママから 聴く、子どもの体調管理の仕方～	2014
東京都・子供未来とうきょうメッセ （対談）	知って安心！これだけは覚えておきたい 子供の病気と対応	2013
東京都豊島区子育て支援課 共催 子育て支援グループ「きりょう」	保育園児の病気・けがへの 正しい対応“最前線”	2009
	もう怖くない！子供の病気 知って対処しよう	2008
東京都中野区 北部子ども家庭支援センター	救急車を呼ぶ前に・お医者さんに行く前に ママとパパでできること	2009
東京都世田谷区子ども部 子ども家庭支援課 共催 ママコモンズ	救急医療のかかり方ワークショップ ～小児科医に聞いてみよう～	2009
東京都世田谷区子ども部 子ども家庭支援課 共催 まちとこ	女医さんになんでも聞いちゃおう！ 子どもの病気	2008
山口県岩国市子育て支援課	「子どもの病気とその対処法～ママが知りたい 耳鼻科子どもの病気～」、「知っておきたい！ 耳・鼻・のどの子どもの症状とケア」	2008

主催自治体および団体	講座テーマ	開催年度
地域振興系		
神奈川県横浜市 港北区役所地域振興課	保育現場で知っておきたい 子どもの病気とケガ(保育ボランティアの方へ)	2015
埼玉県さいたま市市民局市民生活部 市民協働推進課	さいたまマッチングファンド一般助成事業 「お医者さんの上手なかかり方事業」	2014
東京都杉並区区民生活部 協働推進課 すぎなみ地域大学	子育て支援者が知っておきたい、 小児医療のこと	2012
	地域で子育て支援講座	2011
児童館事業系		
東京都杉並区永福南児童館	知って安心！子どもの病気 ～親の心がまえを学ぼう～	2015,2014
東京都杉並区浜田山児童館	病気とのつきあい方、小児科のかかり方	2014
東京都杉並区7児童館合同事業 (井草児童館、堀ノ内東児童館他)	病気の時のケアと上手な小児科のかかり方	2012



〈その他の協働の形〉

①東京都新宿区西新宿保健センターの取り組み

新宿区西新宿保健センターと協働して、子どもの病気に関する冊子を作成し、2009年4月より新宿区のすべての保健センターで配布を開始しました。

出生届の提出時に配布される資料の中にも子どもの病気に関するものがありますが、他の資料に埋もれて、ほとんど読まれないことも多いのが現状です。そこで、この冊子については3～4ヶ月健診時に保健師が「お子さんが病気ของときは、こちらを使ってくださいね」という言葉を添えて手渡しをするようにしたところ、休日・夜間救急の受診数が減ったというデータが出ました。

(現在は新生児訪問時に手渡しをしています)

②東京都杉並区の取り組み

当会を設立して2年目の2008年に、杉並区教育委員会の家庭教育学級に申請して、10万円の予算をいただき、講座の開催を始めました。乳幼児が対象から外れたため、現在はその制度を利用できなくなりましたが、2011年まで続けました。

児童館の職員研修の一環で講師として呼んでいただいたことがきっかけとなって、2013年から児童館主催での小児医療講座が開催されることになりました。近隣の総合病院からも賛同をいただき、小児科医の先生が講師として来てくださっています。

また、当会や児童館の取り組みとは別に、杉並区独自の事業として、区内にある5つの保健センターでそれぞれ年に2回、小児医療に関する講座が開催されるようになりました。定員は1回につき30名、第一子で1歳未満の子どもがいる方を対象としており、地域の開業医の先生が講師を担当されています。

約300の方が、年に10回、つまりほぼ月に1回は、区内のいずれかの保健センターで講座を受けるチャンスを得られるようになりました。

こちらの事業は、東京都の地域医療普及事業に申請し、予算の半分を都が、半分を区が負担して成り立っているそうです。このような形は大変理想的で、妊娠中の両親学級と同じように、小児医療について学ぶ機会が、どの自治体でも得られるようになることを願っています。

8. 講座開催マニュアル

I. 企画する

4. どんな【内容構成のポイント】

①時間構成

要望や条件に応じて変わりますが、基本は約2時間の単発講座です。

■小児科医の先生のお話: 80分

■質疑応答: 30分

■#8000(地域によっては#7119も)、当会のメルマガなど役立つ情報の紹介: 10分

* 託児がある場合は2時間が可能ですが、託児がない場合は1時間程度にしています。

②内容

どのようなテーマ・講座タイトルのときでも、小児科医の先生のお話の基本的な流れは次のように依頼しています。

1. 救急の判断(子どもに起こりやすい熱、咳、下痢、嘔吐などを中心に)
2. ホームケア(同上)
3. 予防接種について(スケジュールではなく、必要性を中心に)
4. 地域医療の現状

9. お役立ち情報

II. よくある質問

Q11. 講座開催はまだ実現できないのですが、チャンスがあれば少しずつでも子どもの病気について親御さんに伝えていきたいと思っています。短時間で伝えられるようなポイントがあれば教えてください。

A11.

講座で必ずお伝えしている大切な3つのポイントは次の通りです。

①「熱の高さ」=「状態の悪さ」ではない。全身状態をみることが大切

②「全身状態をみる」とは、「食う・寝る・遊ぶ・出す」を確認すること
いつものように食べられているか、いつものように眠れているか、いつものように遊べているか、うんち・おしっこはいつもと同じように出ているかを確認する。

③「いつもと違う」という状態に気をつける

「いつもと違う」ときは、どこがどのように違うかを医師に伝える。

「いつもと違う」ことに気づくために、子どもの普段の状態をしっかりと把握する。

くわえて、子どもが病気をしたときに頼りになる相談窓口(#8000、こどもの救急サイト等)や、自治体で制作されている冊子があれば、その冊子を使うようお伝えください。

11. 小児医療に関する提言

知ろう小児医療 守ろう子ども達の会代表・阿真京子

【高齢化社会の医療問題を解決する鍵は、小児医療にある】

私が省庁・東京都の救急や小児医療の検討会の委員を務めるようになって、5年以上が経過しました。世間では、少子高齢化の問題が取りざたされるようになって久しいですが、救急や医療全体に関する検討会で議題にのぼるのは、ほとんどが高齢者の問題です。小児が議題になることは、ほとんどありません。

小児の夜間救急外来の患者数は、ピークからは半減したといわれておりますが、それは治療法の進歩や予防接種の効果であって、かかり方を理解して受診自体が減っているわけではありません。

医療のかかり方を理解すること、医療制度を理解すること。これは、非常に重要なことです。

親になった時期に子どものためを思って身につけた知識は、簡単に消えるものではありません。親となった世代にきちんと医療について伝えておくことで、今の親世代である20～40代が高齢者となったときには、高齢者の医療問題は、現在よりもずっと改善していることでしょう。

啓発は、手間はかかりますが、それほどお金がかかるものではありません。効果は高く、また長く続くものです。

医療は医療者だけで行われるものでも、医療者だけが知っていればいいのものでもありません。子どもの病気を入り口に、医療のかかり方を知り、医療制度を理解し、安心して安全な医療をともに築いていこうという市民が増えていくことを、心から願います。

◎阿真京子が委員を務める検討会(平成27年度)

- ・厚生労働省 社会保障審議会 医療部会
 - ・厚生労働省 子どもの医療制度の在り方等に関する検討会
 - ・総務省消防庁 救急業務の在り方に関する検討会
 - ・東京都 小児医療協議会
- など

おわりに

「知る楽しみ知り合う喜び 小児医療にかかわるすべての人の架け橋に」

私たちが広げていきたいのは、何よりも「安心の輪」です。危機感や不安をあおる活動ではなく、子どもの病気や医療を知ることによって親として成長できる楽しさを伝えたい。そして、立場を越えた人々と知り合い、互いを知り合うことで相手の思いに気づき、つながり、支え合える喜びを、医療についても子育てについても知ってほしいと思っています。

小児医療の環境を改善すると、どんな未来が待っているのか——。

「ゆとりある医療者」が「初めて赤ちゃんを授かり、不安を抱える親」に言えること、それは「心配だったらいつでもおいで」という言葉ではないでしょうか。

今は、その「心配だったらおいで」を言える環境にないのです。休日・夜間を問わず、休憩さえ満足にとることもできずに患者さんに応対する医師や看護師たち。「このくらいだったら家でみていてよ」という気持ちが出てくるのも自然なことだと思います。

また一方、親になっても支えがないことが多い現在の子育て環境下では、心配のあまり休日や夜間でも受診することや、たとえ心配でなくても安易に受診すること自体を責めることはできないと思います。8割もの母親が、子どもを病院等に連れて行くことについて悩んだり迷ったりしたことがあると答えた調査結果もあります。

(<http://www.babytown.jp/scene/health/nayami/001/index.html>)

小児科や産科の医師をはじめ、看護師など信頼できる医療関係者と出会うこと、さらに彼らから子どもの成長や病気について学ぶことで、子育ての不安は軽減されます。そして、**子育てはぐっと楽になります**。また、少し先に親になった人が、あとに続く親を支え、親同士だけでなく地域でも支え合う。その輪の中に産科～小児科の病院やクリニック(医師や看護師)があり、保健センター(保健師)があり、保育園、幼稚園、小学校、児童館等があり……。そのようなあたたかい輪の中で、親は安心して子どもをみる目、家庭でみる目を養っていくことができると思うのです。

行政には、この輪の中にあって、重要な役割を担うことが期待されています。このような輪の中であれば、親は安心して成長していくことができると思うのです。第一子であれば、起きることはすべて初めてのことばかり。子育ての導入期で、孤立することなく、子どもの病気を知り、親を支えようとするあたたかい人たちの輪を感じてほしい。

「必要な人が、必要なときに、必要な医療を受ける」……そのような環境が整うことで、医療にゆとりが生まれます。ゆとりのないところに、優しさは生まれません。

—— **希望の光にあふれて新しくこの世に誕生した、
まぶしい存在であるすべての親子を、あたたかい目で見守り、支える** ——

小児医療の環境が改善することで目指す未来とは、そのような姿なのです。

*** 当資料の内容はすべて、『【自治体向け】医療のかかり方講座 実践マニュアル』からの抜粋です。マニュアルにご興味のある方は、お気軽にお問合せください。**

(公式ホームページ: <http://www.shirouiryu.com>、メール: info@shirouiryu.com)

《マニュアル目次一覧》

はじめに	1
推薦のことば 1	3
1. (社) 知ろう小児医療 守ろう子ども達の会とは	6
2. 団体設立のきっかけと思い	7
3. 事業の柱	8
4. 活動の背景	9
5. 事業によって期待される成果・効果	11
6. 行政による講座開催の事例	13
7. 活動の反響	18
I. 親からの声 (アンケートより)	18
II. 医師からの声	23
8. 講座開催マニュアル	25
I. 企画する	26
1. 誰に	26
2. いつ	26
3. どこで 【会場選びのポイント】	27
4. どんな 【内容構成のポイント】	28
5. 講師への依頼	29
6. 託児	29
7. 費用	30
8. 告知	30
II. 講座当日の運営	31
1. 事前準備	31
2. スタッフの役割	31
3. 会場設営	31
4. 講座終了後	35
【資料1】 講師への依頼のポイント	36
【資料2】 告知・集客のポイント	38
【資料3】 配布資料のポイント	43
9. お役立ち情報	44
I. トラブル事例	44
II. よくある質問	46
初回だけでもデモンストレーションしてもらえますか? / 講座開催に不安や疑問があります。 / 講師は誰に頼めばよいですか? / 講座形式とシンポジウム形式、どちらが望ましいですか? / 親にとって、講座が最も効果的になる時期はいつですか? / 配布資料は新たにつくる必要がありますか? / 集客のコツはありますか? / 講座中に子どもが泣き出して騒がしくなったら、どうしたらよいでしょうか? / 質疑応答の質問は事前に集めたほうがよいですか? / 講座を開催するなら、できるだけ大規模に行ったほうがよいですか? / 子どもの病気について短時間で伝えられるようなポイントがあれば教えてください。 / 講座のテーマは毎回変えた方がよいですか? / 医療の厳しい現実についてはどう伝えたらよいですか? / 講座以外にも、医療環境をよくするために受益者側に伝えられることや、できることはありますか?	
III. 講師依頼フォーマット	53
10. 当会が提供するコンサルティングについて	54
11. 小児医療に関する提言	55
【高齢化社会の医療問題を解決する鍵は、小児医療にある】	55
【保育に関する提言】	56
【ありとあらゆる機会を使って】	58
推薦のことば 2	59
おわりに	61